布とステッキの素敵な関係
― ステッキのおしゃれな世界 ―

Great Relation between Cloth & Stick − Stick's Fashionable World −

柳　谷　廣　之

◆おしゃれなステッキの始まり

「ステッキは、素敵なパートナーです」と、山田澄代さん（サン・ビーム㈱　代表取締役）は言います。

山田さんは、今では日常的に見かける、カラフルな柄のあるステッキ、また折りたたみステッキを世に広めた先駆者。そして、長らく忘れ去られていたシニアに必須のおしゃれアイテムとして、ステッキの価値を復権させた最大の功労者と言っても過言ではありません。

日本で最初のおしゃれステッキ専門メーカーを創業し、1996年には東京都渋谷区富ヶ谷に、当時の日本で唯一のステッキ専門ショップ「ステッキのチャップリン」を立ち上げました。当初は自ら現地で買い付けたヨーロッパの高級ステッキやアンティーク・ステッキの輸入・販売を行っていました。その後、オリジナル商品の自社開発に着手。1999年、GINZAシリーズが完成しました。

このステッキは、福祉用具業界にセンセーションを巻き起こしました。手元は木製とアクリルの選べる２種類。シャフトはアルミ製。洗練された上品な色彩と美しい図案が描かれたもので、当時の日本では珍しい、おしゃれを全面に出したステッキです。

特に、ストレートタイプと同時に開発した５段折りたたみは、カメラ用一脚を応用して作ったステッキで、手元を持ってシャフトを放すと、簡単に１本のストレートになります。重さは約260g、折りたたむと約20cmになり、ハンドバッグにも入るコンパクトなサイズで、携帯用として初めて商品化された優れたステッキでした。

作家・田辺聖子さんは、「ステッキを必要とする熟年、中年女性たちの渇望を癒してくれるような、ハイカラで美しく、使って楽しくなるステッキが、まだ日本に出ていなかった。やっと待望の美しいステッキにめぐりあったのは、チャップリン山田さんに出会った時である」。さらに、「形状、色彩、洗練されたハイカラ風味、まことに眼福というような美しいステッキ、それを用いて歩く足取りも軽やかになるようだ。熟年文化、女性文化がやっと始まったという気がする」と語っています。

HIROYUKI YANAGITANI
サン・ビーム株式会社/ステッキのチャップリン　企画室　室長
〒160-0023　東京都新宿区西新宿6-6-2
ヒルトン東京B1
Tel：03-3344-5488　Fax：03-3344-5477
E-mail：chaplincanes@chaplin.co.jp
yana-c@chaplin.co.jp
〈専門〉編集・デザイン
〈趣味〉釣り

山田さんは、創業当初から医療・福祉の専門機関などの研究活動に協力を続けてきました。2004年、武藤芳照（当時・東大大学院教授）氏を世話人代表として発足された「転倒予防医学研究会」に世話人として参加。予防介護の最重要課題の一つである転倒事故抑止を目的に、分野や領域を越えた専門家の学術活動や、社会に向けての情報発信から実践的活動に力を注いできました。その転倒予防に寄与する優れた製品として、推奨品の第一号に「ステッキのチャップリンのGINZAシリーズ」が選ばれました。

2004年、東京新宿にあるヒルトン東京地下１階に本社とショップを移転。2012年、大丸東京店10階にも専門ショップをオープンしました。ショップ内は、見る人を飽きさせない1500種類ものステッキを展示・販売。時にはアンティーク品を愛でながら、ゆったりとした時間を過ごせるサロンでもあります。日本一のステッキ愛好家を自認する山田さんのこだわりが、随所に現れている空間となっています。

◆

しかし、それは最初から計画して作られたものではありません。

山田さんは３歳の時ポリオに罹り、高熱がさめた時には左半身にマヒ。以来、松葉杖が手放せない生活が続きました。その後は手術とリハビリの日々。５回目の大手術で、やっと松葉杖から開放され、なんとかステッキだけで歩けるようになりました。

今でも「家の中で、床に落ちた広告で滑ったり、絨毯の2〜3mmの厚さでもつまづいて転ぶんです」と話します。現在もリハビリを続けないと、どんどん骨が弱くなり、油断すると転んですぐに骨折へとつながります。ポリオのウイルスは、体が弱ると症状が出てきて、疲れやすく、倒れて動けなくなることも度々あると言います。

しかしハンデをものともせず、その度胸と天真爛漫な性格から、大手生命保険会社でトップ・セールスレディになります。私生活では結婚、出産、離婚も経験。持ち前のバイタリティーから様々な仕事をこなしてきました。

50代半ば。引退前にもう一仕事したいと考えた時、「自信を持って分かるものといったら、長年使っていたステッ

キの事だけ」でした。

今まで、いくらドレスアップしてもステッキだけは同じ。いろいろなところでおしゃれなステッキを探したが、気に入ったステッキはありません。それなら「自分でお店を開こう」と、57歳の時「ステッキのチャップリン」を誕生させたのです。「ステッキを身体のマイナス部分を補うものと考えないで、プラスのものと考えると、心もバリアフリーになります」と言い、その日の気分や洋服によって、ステッキを選べる楽しさと自由さ。おしゃれの幅を広げるステッキで、外出の機会を増やし、行動的に行きたいところに行く。ファッションという感覚で、楽しめるアイテムとしてのステッキを目指したのでした。

◆ステッキと生活文化

ステッキの進化や歴史を見ると、時代や人々の生活を映す鏡のような一面を持っている事がわかります。

聖書や古事記など、文字として記録されるずっと以前からステッキはありました。古代エジプトやギリシャ、ローマの神々も様々なステッキを持つ姿が描かれ、ツタンカーメンの遺跡からも数多くのステッキが見つかっています。

1本の棒であるステッキは、古来から足が弱った人や巡礼などの長い距離を歩く歩行補助として用いられていました。また、蛇や獣を追い払ったり、争いなどの武器や道具としても使用されました。反面、神の宿るご神木のステッキや、信仰する神を表す装飾を施したり、民衆を従わせる権威のシンボルとしてのステッキもあります。このように、ステッキは人の営みの中で、ともに歩んできたのです。

長い歴史を経てきたステッキ。近代の日本を見ますと、明治から大正時代は、紳士のおしゃれなアイテムと言えば、大曲のステッキにシルクハット。他にも自然木を利用したり、手元には象牙や水牛、貴金属を用いたりとステッキが大流行しました。昭和初期の頃には、ハイカラな若者は、ステッキをアクセサリーとして携帯するようになりました。よく「うちのお祖父さんが持っていた」と耳にするのも、この頃の話です。

ステッキは、おしゃれな大人の象徴でもあったのです。もちろん体を支えたり、障害が生じた時には補助という大切な道具としても用いられていました。

しかし、満州事変から第二次世界大戦を迎え、ステッキをおしゃれで持つ人は激減していきます。終戦を迎え、効率優先の高度成長期に入ってからは、生活も合理性や利便性が重視され、ステッキは実用一点張りの時代になっていきます。研究・開発され、歩行補助での機能性は高くなりましたが、その反面「格好悪い」「年寄りのもの」などと言われるようになりました。ステッキを使う事に抵抗を持つ人が増えていったのです。

その頃、山田さんは自分用のおしゃれなステッキを探し

ステッキの名称(折りたたみステッキ)

アンティーク・ステッキ
①手元彫金のスネークウッド　②ガラスのステッキ
③手元七宝焼き　④呪術用ステッキ　⑤手元象牙の鬼神
⑥宮中の鳩杖

仕込み杖－1
①バイオリン　②日本刀　③絵の具セット　④望遠鏡

仕込み杖－2
①ウィスキーボトルとグラス　②パイプ(ブライヤー製)
③ワインオープナー(コルク抜き)　④ダイス

て、海外から購入していました。

ヨーロッパでは、ステッキ文化が脈々と受け継がれ、戴冠式などの国家的儀式や、日常生活でも紳士や淑女のおしゃれとして、ステッキは欠かせないものとして定着しています。手元には、古典紋様や家柄を表した銀製ステッキ。強さを鼓舞する虎や鷲、犬などの愛玩動物もステッキに飾られています。

遊び心をくすぐる仕込み杖も数多くあります。散歩の途中で一杯と、ウイスキーボトルとグラスの入ったステッキ。サンドイッチとワインを持って、公園での会食に使うワインオープナー(コルク抜き)付ステッキ。チェスやダイスなどのゲーム入りステッキ。どこでも座れる椅子にもなるステッキ。さらには、釣竿入りからバイオリンに早変わりするステッキなど。インテリアとして飾っておきたいものも少なくありません。

山田さん所有の、エリザベス女王ゆかりのガラス製ステッキなど、しゃれた逸品の数々。古き良き時代のアンティーク・ステッキや、高度な技術を存分に使った高級な工芸品。数百のコレクションからは、それぞれの時代や生活を感じさせてくれるものばかりで、ステッキの奥深さを知る事ができます。

◆

ちなみに、ショップの名前「ステッキのチャップリン」は、世界一ステッキが似合う男と言われているC. チャップリンにちなんで付けられ、ご遺族との間で正式な国際ライセンス契約を結んで使用しています。

その象徴でもあるステッキですが、映画に出てくる時代背景として、紳士や貴族は大曲や銀の手元を持つステッキを腕に、シルクハットという出で立ちで登場。しかし、チャップリンの役柄は放浪者や労働者。立派なステッキを持つわけにはいきません。そこで登場するのが竹のステッキ。みすぼらしく見えるホームレスであっても、紳士としての威厳を保ち、反骨精神で貴族などを茶化し、権力者たちを笑い飛ばしたのです。

チャップリンの使用したステッキは寒竹という竹で、しかも日本の職人が作ったものです。しかし、これはしなりが強く、体を支えるような実用には向きません。チャップリンの日本びいきは有名ですが、運転手兼秘書として長く務めた高野虎市氏の影響が大きかったと思われます。

◆ステッキ開発と布

ステッキ開発に重要な事は、機能と品質の確立。科学的データに裏付けられた形で、障害のある人や高齢者の生活の質の向上に役立つ、理想のステッキを開発する事を目指しています。さらに、作り手が使い手でもある山田さんの、経験と想像力が大きい事は言うまでもありません。

ファッション性を高めた手元に羽根の入った上級タイプ。ミリ単位で自由に長さを調節できるステッキ。その他にも、軽くて強いカーボンなどと、実用性が高く快適なステッキを作り続けてきました。いずれも、それまでの障害者や高齢者のリハビリ用具としてしか見られていなかったステッキの概念を打ち破る独創的なアイデアであふれています。

同時に、神秘の紫色の木パープルハートを始め、伝統的な竹の杖など、1本ものの高級天然木ステッキの製造も進めています。天然木のステッキは今でも人気が高く、代表的なのが唐木三大銘木と呼ばれる黒檀(コクタン)、紫檀(シタン)、鉄刀木(タガヤサン)。重硬で緻密でもあり、珍重されてきた最高級の天然木です。

他にも稀少価値、鑑賞価値の高い天然木が多くあります。杢の美しさや色、形が特徴の花梨の瘤。1万本に1本ともいわれる、ごく稀に黒色の紋様が現れる希少性の高い黒柿。延寿という漢字が当てられ、病魔を払い寿命を延ばす縁起の良い木エンジュ。世界の中心にそびえる木、世界樹と呼ばれたり、人類はその木から生まれたという神話を持つトネリコ。椿や榊、鹿角など、自然の形をそのまま生かした作りで、鑑賞用として美術品に匹敵するようなものもあります。

世界最高、ステッキの王者といわれるステッキもあります。スネークウッドがそれです。蛇の鱗のような個性的な斑紋が、重厚な印象を与えます。昔から王室や貴族などの特別な階級のステータス・シンボルとして、また家宝として愛されてきました。出材は南米ギニア周辺で、入手が非常に困難な希少木で幻の木と呼ばれています。お使いの瀬戸内寂聴さんは「木目の紋様は象形文字のよう」と表現されています。手元を大きく曲げる技術、彫刻や彫金などの趣向を凝らした装飾など、芸術性も高く、完成された高度な工芸品は、多くの皇族関係者や著名人が使っています。

このように、いわれや物語を持つ天然木のステッキを調べていきますと、さらにステッキの奥深さを知るという楽しみにもつながっていきます。

◆

現在、実用性の高いステッキは、加工性に優れているアルミやカーボン製が多くみられます。

しかし、かつては茶や黒などの暗くて目立たない色柄が多く、ファッション性に欠けていました。GINZA シリーズが登場し、ステッキが鮮やかなものに変わりました。マスコミも、ステッキを取り上げるようになり、今ではテレビやファッション雑誌でも、おしゃれ小物としてステッキが使われるようになりました。街を歩くにも、必要としている人が恥ずかしくなく、気軽に使えるようになってきたのです。

服装のおしゃれに合わせて、良いアクセントにもなります。「街に出て、人に見せたくなるステッキ」と山田さんは言います。また、このようなステッキを持つと人の心理的なものまで影響し、1本のステッキだけで気持ちが明るくなる事も珍しくありません。「おしゃれなステッキと一緒に歩けば、心も足取りも軽やかになる」との、山田さんの信念から出た挑戦と開発の成果とも言えます。

◆

時代は変わり、さらなる新たな開発が始まりました。それは、今あるステッキのファッション性を損なわず、さら

に耐久性を持つ。長く愛せるステッキです。量産も可能で、しかも人の持っていないオリジナル性へのこだわりをも満足させる事です。

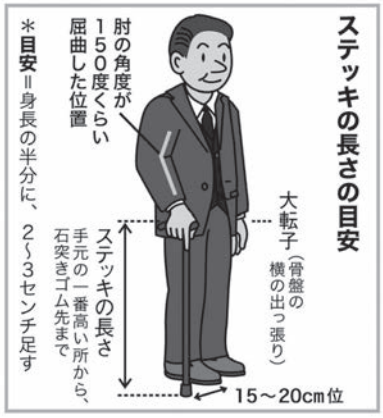
そこで登場したのが布です。ステッキに布を使うという事。アルミのシャフトに布を巻く事によって、新たなステッキが生まれました。

今までのステッキは、花柄などをシャフトにプリントするものでした。それによって、簡単に量産化できます。しかし、ステッキはよく倒されたり、物に当たったりします。その際に、傷などが付くと下のアルミの白い地色が出てしまい、一気におしゃれ感が失われてしまいます。それを補うためにシャフトに布を巻き、表面を特殊コーティングする事によって、より強化する事ができました。傷が付きにくく、愛用のステッキを守る事ができるようになったのです。またプリントしたものは、長く使用していると色落ちや太陽によって日焼けしてしまうものもあります。それも布を使用する事によって色の変化が少なくなり、問題が解消されたのでした。オリジナル性についても、柄のある本物の布ですので、必ず同じ模様が同じ位置にあるという事はありませんし、まったく同じものは作れません。

色は実際の生地の色と違い、水に濡らしたような、しっとりとした仕上がりになりました。これによって、一見派手な色柄でも、落ち着いた色彩で、大人らしい落ち着きを持つステッキになりました。もちろん失敗もあります。メリハリのない色柄の布を使用すると、サンプル段階で何の模様も見えないという事もありました。コーティング剤を含む、試行錯誤を繰り返した結果、ついに長く愛用できる新しいステッキができあがったのです。

ステッキの手元の種類

①大曲　②Ｌ型　③Ｔ型　④新型　⑤大黒型　⑥Ｙ型　⑦アニマル



現在では、ライセンス契約により、リバティファブリックの布を使ったステッキも作っています。リバティとは、英国のアーサー・ラセンビィ・リバティによって、1875年に創業。1890年代には、ロンドンで最もおしゃれな店と言われるようになりました。アール・ヌーヴォー様式、ウイリアム・モリスの文様や柄など、優美なプリントデザインで、今なおファッションの最先端に位置し続けています。その個性的な色調と繊細な図案は、世界中でも大人気。一部同柄の布製ストラップも作りました。英国紳士風、貴婦人のステッキとして、さらに一歩前に踏み出したのです。

布の持つ素材感とステッキが、大人のおしゃれ、新しいスタイルの可能性を引き出してくれたのです。

◆ステッキの使いこなし

美しい、素敵なステッキは体だけではなく、心を自由にしてくれます。また、「転ばぬ先の杖」「早めの使用は、賢者の知恵」という言葉をよく耳にします。普段は必要なくても、旅行で長く歩く時だけでも活用すると、楽な事はもとより、はずみで転倒する危険も減ります。長寿の秘訣は歩く事で、そのためには転んでのケガは大敵なのです。

転倒 → 骨折 → 寝たきり → …という、負の連鎖を断ち切る事が重要です。1本のステッキの値段と、骨折などにかかる医療費との差を一度考えてみてください。

また快適で、良い姿勢を保つためには、ステッキの長さは非常に重要です。山田さんは「自分に合ったものを。体に合わないステッキを使っていると、体のバランスが悪くなり、かえって体を悪くしてしまいます。それによって、歩くことが苦痛になり家に閉じこもってしまうという、負の連鎖になってしまう」と、よく話されます。

長さは、山田さんの長い使用経験から、「ステッキを使って歩いた時、両肩ができるだけ水平であることが大事」と、身長の半分に2～3cm足した長さを目安にしています。体に痛みがある場合は、少し短めにした方が寄り掛かりやすくて楽です。スタイルを良くみせるには、少し長めにして背筋を伸ばして歩いてください。

長さ調節の付いているステッキは、靴の高低差や体調に合わせて長さを変えると、より快適に使用できます。長さの合わないステッキに、無理して体を合わせていると肩や肘、腰などを痛めたり、様々な障害が出てきます。1cm違うだけでも、随分体感に差が出ますので、長さのわからない人は、早めに専門の人に相談する事をお勧めします。

折りたたみステッキは、携帯を目的にしたものです。バスや電車での移動、レストランなどで使わない時にコンパクトに折りたたんでおきます。しかし、折りたたむ必要がないのに日常使っていると、同じ靴を毎日履いているのと同じで、ステッキが疲れてしまいます。ステッキのジョイント部分に負荷がかかり、金属疲労を起こす事があります。

近所への買い物やフォーマルな場では、扱いやすいストレートタイプを使う事をお勧めします。

また折りたたみステッキは、使用していない時は伸ばしたままで保存する事。地震などの災害に備えて、折りたたみを購入する人が増えていますが、折りたたんだまま何年もそのままにしておくと、連結ゴムが伸びてしまいます。いざ使う時にゴムが伸びていて、使用できない事もありますので注意してください。

おしゃれなステッキとして、季節や服装に合わせて何本も持っている人が増えてきました。特に女性は、最低3本のステッキを使い分ける人が多いです。ストレートと折りたたみと、3本目は冠婚葬祭用です。場によっては花柄では失礼にあたる場合もあります。ステッキを使う際、TPOによって使い分ける事も必要となります。

足元の靴も大事なように、ステッキの先に付いている石突ゴムも重要な要素です。今のように舗装されていない道を歩く際、地面に突き刺しながら歩いた事から、石突という名が付けられたそうです。かつての高級品は、ステッキの先に水牛の角などが使われていましたが、現在ではゴムが用いられます。これは、滑り止めやステッキを突いた時の衝撃緩和にも役立っています。しかし、磨耗しますので交換が必要です。磨耗したものを使っていると、雨の日など滑って転ぶ危険もありますので注意してください。

ステッキの付属品として、ストラップがあります。ステッキは、置く場所が少ないため、立てかけておくと倒れる事がよくあります。そのために素敵なステッキの手元などが割れたり、傷が付く事になります。ストラップを手首に付けておくと、バッグなどから物を取る時に、置く場所を探す事もなく、すぐにステッキから手を離して行動に移れますので、付けておく事をお勧めします。

体にあったステッキがあっても、使い方が正しくなければいけません。まず、足腰のサポートのために使用するのでしたら、カバーしたい足などの反対側の手に持ちます。カバーしたい足とステッキを同時に出す事によって、足にかかる加重をステッキが負担してくれて、楽に歩けるようになります。利き腕の反対側に持つ事になると、始めはなかなかうまくいきませんので、練習が必要となります。

手元は、体重がステッキの中央にかかるように持ちます。手元をしっかり握る事がポイントです。手元の端を持つと、バランスが崩れやすくて危険です。ステッキに体をあずけるぐらい加重をかけたい人には、Y型という特殊な手元形状のステッキがあります。この形状により、ステッキがしっかり体を受け止めてくれ、手のひらが痛みにくくなっています。大黒型のような、手元を手のひらで全体を包むように持つ特殊なタイプは、止まって立っている時に体の前方で構え、体を支える役割をします。ちなみに、ヨーロッパの紳士が、このステッキを脇に挟んで歩くシーンが、映画の中でもよく見かけます。突いて歩かないのです。興味のある人は、注意して見てください。また新しいステッキ・スタイルを発見できるかもしれません。

自分から、なかなか進んで買い求められない人。おしゃれなステッキという世界を知らない人。購入したくても、どこで買ったらいいのかわからない人などが、まだたくさんいます。

しかし、時代が移り行く中、若い人が祖父母や両親を案じてステッキを贈るという事が増えてきました。また、老いや身体の変化を後ろ向きに捉えるのではなく、かけがえのない自分の人生に対するご褒美として、自分用に購入する人も出てきました。ステッキはファッションとして、また人々の生活の一部として当たり前に存在し、自由に選び自由に使える時代となってきたのです。

◆

山田さんはステッキに感謝を込めて、毎年11月5日に日本で唯一の「杖の清め祓い」を行なっています。古代、天照大御神を最も良い場所におまつりするために、倭姫命が、大御神の御杖代(みつえしろ)として、杖を突いて諸国を巡り、「この国に鎮座しよう」との御神託を聞いた場所が伊勢の地、今の伊勢神宮のある場所でした(「日本書紀」伊勢神宮起源譚)。11月5日は倭姫命ゆかりの日であり、日本中から亡くなられた人の杖や、古くて壊れてしまった愛用のステッキなど、寄せられたステッキを清め祓いさせていただいています。その後、使えるものはリユースし、毎年地震や津波などの被災地へ送っています。2011年の東日本大震災では100本以上のステッキを送り、利用していただきました。

文化事業として、2010年「ステッキなステッキ展」(ヒルトン東京B1特設会場)、2013年「C. チャップリン&愉快なステッキ展」(大丸東京店10F特設会場)を開催しました。ステッキを作る職人が、段々少なくなってきた昨今、山田さんは、「100年越えたアンティークのステッキは、今でも輝いています。傷付いた天然木のステッキは、風合いとなり趣が出ます」と言い、世界初の常設のステッキ博物館を開く事を目指しています。国によってステッキも様々。王侯貴族が愛用した高価な、また当時最高の技術を凝らした一点もの。古事記や日本書記の時代から用いられる祭事用の神々の杖。ステッキを通して、世界の歴史や文化から生活までを見せる。「ステッキって、こんなに面白い」と知らせるのが夢だと言います。「多くの人に、ステッキを心から楽しんでほしい」との願いを込めて。

◆

最後に、ステッキについてもっと知りたい人には、矢野憲一氏著の「杖」(法政大学出版局)をお勧めします。

山田澄代さんについては、監修・平林冽氏の「杖と歩行器がわかる本—歩行を守るいきいきマニュアル」(医事出版社)に執筆。また、高嶋健夫氏著の「障害者が輝く組織」(日本経済新聞出版社)にも取り上げられています。

文中の「転倒予防医学研究会」についての情報は、http://www.tentouyobou.jp/ をご覧ください。